

吾君爾戲奴者戀良思給有茅花乎雖喫彌瘦爾夜須

〔萬葉集十四〕相聞東歌勸國未

宇倍兒奈波和奴爾故布奈毛多刀都久能奴賀奈敵由家婆故布思可流奈母

〔類聚名義抄人〕僕僕上俗下正和ヤツコ和ホク

〔倭訓采前編三十四〕やつこ 神代紀に奴僕をよめり臈兒の義賤稱也よて人を罵る詞にもいへ

り古へ男女を通じてよべり神代紀に妾をよみ倭名抄に婢をよめる是也自謙の辭にも見えた

り

〔日本書紀二〕一書曰皇孫問曰汝是誰之子耶對曰妾是大山祇神之子名神吾田鹿葦津姬亦

名木花開耶姬因白亦吾姉磐長姬在

〔日本書紀三〕戊午年六月彼處野有人號曰熊野高倉下忽夜夢天照大神謂武甕雷神曰武

甕雷神對曰雖予不行而下予平國之劍則國將自平矣

〔書言字考節用集人倫〕僕自稱也下官遊仙吾今日本紀賤子又云

〔遊仙窟〕余答曰下官是客觸事卑微但避風塵則爲幸甚

〔藻鹽草十五〕我

やつかればわれと云こと

〔倭訓采前編三十四〕やつがれ 僕をよみ神代紀に吾皇代紀に賤臣奴又妾遊仙窟に下官をよめ

り自謙の辭憔悴枯槁の義也といへり一説に奴こ吾れの義こあ反り也又奴がむれ也ともいへ

り

〔日本書紀一〕一書曰故伊弉諾尊問之曰汝鳴尊何故恒啼如此耶對曰吾欲從母於根國只

爲泣耳